The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<図書紹介>スチュアート・デュラント著藤田治彦訳『近代装飾事典』岩崎美術社1991,352P
Author(s)	羽生, 清
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 98-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53178
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スチュアート・デュラント著　藤田治彦訳
『近代装飾事典』　岩崎美術社　1991，352P

本書は，Stuart Durant の『ORNAMENT －A Survey of Decoration since 1830 －』(1986) を本学会会員藤田氏が訳したものである。機能主義への発展の物語とは異なる装飾という視点から，近代デザインの流れを捉えた興味深い書物である。それぞれの時代の魅力を豊富な図版によって語らせるこのような著作は，デザインについて新たな視点での議論が求められている今日，時を得た仕事であると思う。以下十二に分けられた各章を追いながら，その内容を紹介したい。

「第１章　装飾の百科事典」は，多くの装飾についての書物がどのような内容を持つかを知るうえで大変役立つ。特権階級の趣味であった装飾が，産業革命後の大量生産と結び付き新しい階層の要求に応えて，さまざまな様式を示す装飾の百科事典が必要とされてゆく経緯もよく理解できる。

「第２章　大自然と装飾」プラトンの思考やゴシックの大聖堂に見られるように，インスピレーションの源泉として自然を崇拝する考えかたは古くから存在していた。19世紀初め，万物のデザイナーとして信仰されていた自然は，その終わりには進化論的科学主義によって解剖され搾取されるべき対象に変った。唯物論の侵入と信仰の衰退によって引き起こされた緊張は活力を生み出し，本書では，アール・ヌーヴォーを1860年代から1870年代の植物形態を基礎とした装飾様式の特異な変形体として捉えている。

「第３章　幾何学的装飾」幾何学的装飾の最も華麗な展開のひとつは，イスラム美術である。オーウィン・ジョーンズのアルハンブラに関する調査は，19世紀中ごろの英国に幾何学的装飾への興味を覚醒させ，彼は最も熟達した幾何学的作風のデザイナーとして認められた。1960年代，生物学者アンソル・ホリディは，イスラムのデザインを出発点としてはいるものの，コンピュータを用いて，それまでは考えられなかった複合性を有する規則的なグリッドを描くことに成功した。

「第４章　ゴシックの復興」中世の信仰心と華麗さとは，道徳家と審美家にとって，19世紀の物質主義より魅力的であった。A.W.N. ピュージンは，彼の世代で最も熟達したゴシック様式のデザイナーであったが，その仕事は，英国人にとってあまりにもローマン・カトリック的であった。ジョン・ラスキンは，理想的なプロテスタントのゴシック擁護者であった。彼は建築を国家の精神的発展の物差しであるとし，建物に生命をもたらす装飾について考えたのである。

「第５章　折衷主義」折衷主義は，過去からの借用，創造性の欠如として手厳しく裁かれてきた。しかし，実際のところ19世紀のデザイナーは，ピュージンのゴシック装飾でさえ，いくつかの時期にまたがる中世様式の抽出物である。折衷主義は，歴史主義の分流にすぎないとも言えようが，より積極的に捉えるならば，それは未曽有な

視覚情報の侵入に対する合理的な反応であったと見ることも出来る。

「第6章　東洋趣味」18世紀にはシノワズリーが流行し，後にはジャポネズリーが流行する。1851年のロンドン大博覧会には，東インド会社の多くの繊維製品が大いに賞賛された。装飾の百科事典の出現と共に，東洋のモチーフは，無意識的なレパートリーの一部となってウィリアム・モリス，レオン・バクスト，アントーニ・ガウディ，グスタフ・クリムトのような互いに遠く離れた人々の作品のなかに見られるようになるのである。

「第7章　日本礼讃」英国の芸術家たちにとって，1862年の博覧会と共に日本への興味が始まった。この博覧会は，初代駐日英国大使ラザファッド・オルコックの企画の成果であった。19世紀末までには，かなりの日本美術が美術館や図版でみることが出来るようになり，その構成のあり方と装飾の特徴は急速に浸透し，西洋に吸収されていった。西洋美術は日本から莫大な富を得たのである。

「第8章　プリミティヴィズム」W.G.コリンヴッドは，多くの原始装飾は，編んだものに起源を持つと考えた。そして，その制作過程から生まれるいくつかの形は，たとえば，円は太陽，ジグザグは波，螺旋は蛇といったように，自然崇拝と結び付いたモチーフとして愛されてきた。1890年代にブリティシュ・コロンビアの太平洋岸インディアンのなかに入って行ったフランツ・ボーアズの人類学的調査は，個人主義的な西洋の芸術とは異なる原始的な表現の本性をより深く掘り下げるものであった。

「第9章　アーツ・アンド・クラフツ運動」アーツ・アンド・クラフツ運動の最も重要なメッセージは，自己表現の手段を奪われた人々は獣的になるというラスキンによる中世建築の理解である。しかし，最盛期の運動の理論と実践を支配したのはラスキンではなくモリスであった。ゴシック主義者たち，東洋主義者たち，そして折衷主義者たちのすべてが，モリスのための道を準備したのである。芸術の特別な役割への関心，自然と伝統への強烈な情熱，これこそアーツ・アンド・クラフツ運動が特に確保していたものである。

「第10章　アール・デコ」アール・デコの名は，1925年にパリで開催された現代工芸美術国際博覧会に由来する。展覧会の組織者によれば，オリジナリティは斬新な考案においてと同様，既存の芸術形態の発展においても示すことが出来る。従って，アール・デコ様式はその本質から折衷的であり，多くの芸術運動を濃縮して生まれてきている。だが，この展覧会のころ勢いを増し始めた建築とデザインの近代運動は，装飾を蔑視するようになる。そして，アール・デコは，都会の低俗な趣味を連想させる言葉になってしまう。

「第11章　モダニズム」装飾を攻撃したあまたの言説のなかで最も影響が大きかったのは，ル・コルビュジエの『建築をめざして』(1923) であった。彼の文体には，かっての未来派が持っていたような無愛想な説得力があったのである。しかし，ハーバード・リードが語るように，装飾は人間心理に根ざしており人間生活に不可欠である。モダニズムと装飾は必ずしも敵対するばかりではないことを，バウハウスのテキスタイルやアイリーン・グレイのデザイン

が証明している。

「第12章　1940年から現在まで」1939年の第２次大戦の勃発と共に，近代運動はヨーロッパでは停止した。バウハウスの巨匠ヴァルター・グロービウスとミース・ファン・デル・ローエはアメリカへと逃れ，アメリカが近代運動の中心となった。ポップ・アーティストによる活力に満ちた20世紀の都市文化の発見は，諸芸術を活性化させた。その影響はいまなお私たちと共にある。1966年にアメリカの建築家ロバート・ヴェンチュリはポスト・モダニズムの原典である『建築における複合性と対立性』を出版し，禁欲的な正統派近代建築に異を唱えた。今や装飾が再び自己を取り戻すであろうことは疑いない。

以上，12章の流れをみてきたわけであるが，本書の魅力は要約出来ない細部にこそある。各章に続いて配列されている図版には初めて目にするものも多い。これまでの近代デザイン史の文脈からはずれていた原始美術や東洋美術の魅力的なモチーフが，著者の選択眼を通して私たちに新しい装飾の読み方を教えてくれる。

「訳者あとがき」に触れられているように，これは19世紀の世界の博物館，イギリスにおいて初めて生まれえた書物である。しかし，英国の研究者の装飾についての視点には若干の疑問が残った。アール・ヌーヴォーに現れた自然科学的な傾向は，本書を見る限り了解できるが，装飾の病とまで言われて世界に広まった現象は，近代の装飾について語る際，１章設けるべき重要な事項ではなかったか。

また，アール・ヌーヴォーであれば，自然と深い関わりを持つと同時に日本美術や折衷主義とも切り放せない。すべてを飲み込んで繁茂する装飾を章分けすることの難しさは随所に感じた。それをどのように分類するかは著者に委ねられている。事典という邦名が付けられるような客観的な記述形式を取ってはいるものの，極めて主体的な判断のうえに成立した書物である。そのような文献をどう読みといてゆくかは，私たち読者に与えられた快楽であるのかもしれない。

デザイナー小事典，様式別文献一覧，人名索引，事項索引など，更なる研究のための懇切丁寧な配慮を加えながら，研究者としての新しい視点を突きつけて来るこのような翻訳書が増えることによって，日本のデザイン研究は層の厚みを増して充実してゆくと思う。本文中に出て来る原著のタイトルが同頁に併記してある訳者の工夫も有難い。

また，研究を深めて行く手順が明記されている本書は，多彩な状況のもとでデザインを学び始めた今日の学生たちがひもとくにもふさわしい。と同時に，多様化する消費者のニーズを前にした現場のデザイナーにとっても実践的なヒントを満載している。

羽生 清　京都芸術短期大学